

## 繪端書

岩代 服部 貞子

散歩はすれど、田の畔の蓮華草踏むは二つの足、二もとの董取りて、二つ並べる、机上に差せど、右なる座蒲團は、いつも冷やかなり。あゝ兄上は今頃如何にと思ふ折から、郵便！とる手おそしと見れば、オ、それよ、戦地よりの繪端書――勇ましく肥えたる馬のひつめのもとにやさしの董の――にたゞ五文字「また咲き候」と。

## 蝶々の墓

岩代 服部 貞子

水入ににほふ、董の香慕ひて、まよい入りしは汝が運命。アルコールの香り高き、理科室の机上にあはれ早速の犠牲、無残やその双羽はもぎ取られて……夕日なゝめなる、校舎の裏の、若草もゆるるところに、そが遺骸は埋められつ。かの董手向けて、かの水そゞぎて、さて水莖のあとうるはしく……「嗚呼蝶々の墓」……。

## 靜ちゃんの汽車

岩代 服部 貞子

「これは靜夫が畫ですよ」、との姉さんからの繪葉書と一緒に着いた女學世界、見ると口繪の裏に墨黒々と横はる曲線圖形、オ、これは汽車である。あゝこの汽車、ゆがんで居るこの汽車、よしや私のこの身軀は乗せてゆかれずとも、私のこの靜ちゃんにいたい、だつこしてやりたいと云ふこの思は乗せてゆかれるでありませう……。

### 【入力者注】

底本には一部傍点がありますが、煩雑を避けるため除きました。

底本に行を合せるために、句読点のフォントサイズを一部小さくしました。

初出・底本…「第十三明治才媛文集」明治四十(1907)年八月二十六日(東洋社)

入力…小林 徹

公開…令和六年九月三十日。

リンク…[水野仙子作品年譜](#)に戻る。